

## 粉碎玉手箱

鷹司秀の腰が爆発した。

流石に毎晩酷使しすぎたのだ。

正確な診断名は知らないのだけれど、いわゆるぎっくり腰というやつらしい。いつも通り楽しげに私を攻め立てていた鷹司秀が、いきなり無言になつて蹲つた時は普通に動搖してしまつた。

よくわからないが好機と思い逃げてみたものの、内側からも指紋認証をパスしなければ開かない最悪な玄関扉のせいで、逃亡は失敗に終わつた。

痛みにうめく鷹司秀が私の一連の行動を眺めつつ、どこかに電話をして早々に医者を呼んだのも記憶に新しい。

同時に来た黒服に私は別の部屋に隔離されてしまつたので、白衣の男がどのような診察をしたのかは知らないが。

ただ全員が帰つて家の中での（ある程度の）自由を取り戻した時に、鷹司秀が「腰をやつちやつた」と雑な説明をしてきた。

寝つきりにでもなるのかと思つたが、ぎつくり腰の療養法は普段と同じ活動を心がけることらしい。

しばらくは起き上がるのも苦労していたが、懸命なりハビリにより徐々に回復傾向だ。杖を使わなければ歩きもできない時期も過ぎ、今はなんとか前のように暮らしている。流石にセソクスほど激しい運動はできなかつたものの、鷹司秀は時々痛み止めを飲みながらヨロヨロと仕事に行つたり、帰つてきて家事に励んだりしていた。

ぶつちやけて言うと、良い気味である。

時々呻き声を上げながら動きを止めている鷹司秀を見ていると、胸がすく思いだ。

「待つてて、すぐにご飯作つちやうから」

腰を痛めてしまつてからは、流石に手のこんだ料理は難しいらしい。

最近はどこからともなく届けられてくる料理が、食卓の主力だ。

宅配とはいえ、その味は私が自由に暮らしていた頃に食べていたものとは全く違う。デパ地下で買うような見た目のプラスチック容器に入つていてるけれど、明らかにそれよりも手がこんでいる。

今日の夕飯は、生春巻きに肉団子、その他もろもろ。

奴が作つてないというだけで、五割増しくらい美味しく感じる。

脱出という主目的は果たせそうにないとはいっても、この展開は歓迎している。

洗い物が増えるし、そのプラスチック容器から直接食べればいいのに。まめな性分であるらしい鷹司秀は、今日もいそいそと料理を高そうな皿の上に載せ替えている。

ちなみに、鷹司秀が立ち歩けるようになるまでは、黒服の男がエプロンをつけ家事に勤しんでいた。

サングラスをつけたまま知らない男が、家中をウロチョロする異様な光景。

思わず彼が来るたびに目を奪われてしまっていたために、鷹司秀の嫉妬によって黒服滯在中は目隠しをされた。

ついでにめちゃくちゃネチネチした愛撫を食らったりして、本当に最悪だった。腰が爆発した状態でよく性欲キープできるな。

「お腹すいた？ ちょっと待つてね」

出来合いのものを移すだけだから、包丁や火はいらない。

そういうわけで、私は危険なものを全て封印されたキッチンへの立ち入りを許されている。

もちろん、別に手伝つたりはしない。

菜箸を使って皿に料理を持つていてる鷹司秀の、スラックスにしまわれている裾のあたり一つまりは腰を指先でぐつと押した。

「……っ！……ぐ、こらっ……！」

鷹司秀が、悲鳴を堪えて崩れ落ちる。

普段は見ることのないつむじが視界に現れたので、とりあえずそこも押しておいた。くらえ下痢ツボ。

ちなみにつむじに下痢ツボがあるというのは、デマらしいからこれはただの勢いだ。

屈強な肉体を持つ鷹司秀だが、こうなつてしまえば筋肉などただの無駄肉である。

「駄目だつてば……治つたらいくらでもつづいていいからつ……あぐつ……！」

鷹司秀のたしなめを無視してもう一度腰を指で押すと、作業台に手をかけたまましゃがみこんだ状態で、悲鳴を漏らした。

いい気味である。

実を言うとこのしようもない嫌がらせを、鷹司秀が腰を痛めてから一日数回は必ずやつている。

相手が抵抗できないとわかり切っているので、大変楽しい。

こんな状態でもしつかり家からは出られないようにされているのは、流石の最悪さだけれど。

毎日同じ展開なのだから、縛るなりして治るまで私を拘束していればいいのに。

鷹司秀は珍しく私が自分から寄つてくる状況が惜しいらしく、対策を取れずに入いる。

そろそろお腹が空いたので、つつくのをやめる。

鷹司秀は浅く長く息を吐きながら、なんとか立ち上がって再び食事の準備を再開した。

こいつの腰痛、一生治らなければいいのに。

そんなことを思いつつ、私は食事が出てくるまで暇だからリビングでテレビを見るため、その場を後にした。

しばらくして全快した鷹司秀に、これまでの復讐の復讐をされるのはまた別の話だし、以降風邪などで弱ると私が寄つてこないかと、期待に満ちた目でこっちを見るようになつたのも別の話である。